

琉球大学学術リポジトリ

芥川龍之介「西方の人」注釈

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小澤, 保博, Ozawa, Yasuhiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/982

芥川龍之介「西方の人」注釈

小澤保博

A Commentary on R. Akutagawa's The Man in the West, I

Yasuhiro OZAWA*

(Received November 30, 1987)

1 この人を見よ

私は10年前文壇に登場した頃文学的素材としてカトリック教に興味を持っていた。大正8年、大正11年の二度の長崎旅行の折見聞した「大浦天主堂」の記憶は今も私の胸のうちにある。この種の私の興味は、先学の北原白秋や木下杢太郎のカトリック研究に負うところが大きい。

また「奉教人の死」を執筆していた頃の私は、殉教者の病的な心理に興味を持ち心ひそかに引かれるものがあった。ところで精神的、肉体的に追詰められ衰弱を感じている最近の私は、ようやく新約聖書のなかのキリストその人を求める様になったのである。今更人生の同伴者としてキリストを求める私の姿は、西洋人には無論のこと現代の日本の若者の失笑を買うのであろう。人生の半ばで道に迷った私は、今の若者達が興味の片鱗をも示すことのない、むしろその教養を拒否するところのキリストの人生に関心を抱く様になったのである。日本人である私が新約聖書のなかで把握したイエス像は、かつて西洋人が掲げたイエスではない。私が聖書の中から恣意的に求めてきたそれは、余りに日本的、叙情的なイエス像である。学問的著述をしないのは、論証的記述が困難で有るからではない。歴史的、地理的正確を期する為なら既刊のキリスト伝が容易にその任を果たすであろう。今の私はキリストの個々の言動について解説を加えるだけの時間的余裕を持たない。新約聖書通読の過程で心に映じた恣意的なキリスト像を記す

ばかりである。厳格な日本のキリスト教徒たちも一作家の把握したキリスト像に異議を唱える事もあるまい。

2 マリア

マリアは平凡な女であったが、ある夜神の意思によって宿命の子キリストを生んだ。彼女の持っていた特性は、あらゆる平凡な女の持っているそれであり、凡才の男達が生まれながらにして備えている属性でもある。マリアの示す平凡な日常性は、我々の周辺に散在する生活必需品の中にも見出だす事ができよう。彼女の身辺にゲエテが求めたような精神的向上を促す要素を見出だすのは誤りであり、その属性は愚直の一語に尽きる。

私生児を生んだマリアは、苦難の人生を平凡に過ごしたが、その内実は多くの世間の母親と同じく処世の才と愚直さ貞淑さによる。こうした強固な精神風土に反逆したキリストの人生はニイチエの人生にも一脈通じるものがある。

3 聖霊

我々は風や旗の動きに対して理性で押えることの出来ない精神の充実を覚えることがある。聖霊は聖書が語るように神聖なものという訳ではない。ゲエテは自己制御できない精神の動きに対して「デーモン」の名を与えて、理性によって自分の心が操作出来なくなることを恐れていた。聖霊を内に宿したキリストの近親者達は、何時自分の精神の動きを理性で押えられなくなるか分らない。聖霊は悪魔、天使、神のいかなる属性でもない、道徳を超越したところに位置

* Department of Japanese Language, college of Education, University of the Ryukyus.

しているのである。イタリアの精神病理学者ロムプロゾオは狂人の行動に聖霊の動きを見出している。

4 ヨセフ

キリストの劇的人生において父のヨセフは何の役割をも果たしていない。キリストの父大工のヨセフの役割は母のマリアの存在の内部に埋没している。つまりマリアの名前を挙げる事でヨセフの存在を示す必要がないと言うことである。

5 エリザベツ

キリストの母マリアとバプテスマのヨハネの母エリザベツとは友人関係だった。平凡な友達から二つの才能が誕生したのも偶然であれば、ヨハネとイエスの二つの個性の宿命的出会いが、既に母親達によって準備されていたというのも偶然である。我々の人生の決定をなす要因の多くは、この様に偶然性が高いのである。

6 羊飼ひたち

美しい娘マリアが私生児を生んだ事は、当時の庶民達に醜聞の話題を提供したことであった。このときからマリアは世間の口さがない風評に耐えて辛苦の人生を生きねばならなかった。

7 博士たち

東方の博士達はキリスト降誕を示す運命の星を見ることで救世主出現の予兆を感じ旧約聖書の世界で約束された祝福の品、黄金、乳香、没薬をもってキリストに会いに来た。救世主出現を予見した彼等は当時でも少数派であった。他の大多数の博士達は旧約の世界で予見された救世主降誕の意味を理解せず、また少数の理解者も救世主の悲劇的人生に対して世俗を生きる者の見地から哀れみの視線を投掛けるばかりであった。

8 ヘロデ

ユダヤの総督ヘロデは救世主キリストの精神主義が全く理解できず、自己の持っている地上

の権力に徹底的に執着を示した人間である。精神的にユダヤの王であるキリストの存在に自己の権力の危機を感じた彼は、キリストの故郷ベツレヘムの二歳以下の子供を地上から抹殺した。殺人の罪悪によって汚れたヘロデの両手に対する我々の不快感は、フランス革命で大量殺戮に対する不快感に通じるものがある。精神の片鱗も感じさせないヘロデの存在に対して、我々が憎しみや軽蔑を覚えることはあるまい。ただ気の毒に思うばかりである。いつ奪われるか知れない地上の権力にしがみつくとヘロデは不安な面持ちで、永久不変の精神の王国、オリーブや無花果に囲まれたキリストの世界を見おろしている。精神の関与しない、とびきり実用向きのヘロデのような人間は、民主主義によって排除できない種々の社会の病巣を取除くのに必要である。

9 ボヘミヤ的精神

物欲を初めとして地上の全てに執着心の薄い枯淡なキリストの性格は、彼生来のものであると同時にエジプト、ガリラヤ、ナザレと移り住んだ幼い日々の境遇に負う。我々は物質や土地に対する執着心の薄い、幼いキリストのような子供を転勤の多い海軍士官の子弟に見出だすであろう。

10 父

キリストはナザレで青年期を過ごした後、自分が私生児であることを知ったであろうし、あるいは神の子としての自己の使命を自覚したであろう。彼にとって出生の秘密、私生児の自覚ほど衝撃的なことはなかった。キリストはこの時家庭を見限ることで完全に精神的独立を成したのである。私生児ストリンドベリイが家庭を捨てる事で精神的に独立し、実生活の不幸を芸術上の幸福に転じたのと同じである。家庭を失って孤独であったキリストがバプテスマのヨハネの先導によって神から与えられた使命を自覚したのは、彼にとって最大の幸福の一つである。我々には精神の拠り所となる家庭を失い、救世主としての使命を自覚する以前のキリストの孤

独な心の有り様を付度することができる。荒野で布教活動をするヨハネは物質的には恵まれなくても心は野心で満ちて明るかったであろう。これに反して救世主としての自覚を持つ以前のキリストの精神の危機には救いがたいものがある。

11 ヨハネ

バプテスマのヨハネにはキリストの精神主義は到底理解し難いものであった。彼は現実の社会においてのみその存在の意義を有している。こうした側面でヨハネは結局キリストに到底及ばなかったのである。キリストに最初に神の道を呈示し、自覚を促した先導者としてのヨハネは、その肉体的存在感において優れていたが晩年はその迫力を失ってしまっていた。

「キリストはお前だったか、わたしだったか？」このヨハネの最後の言葉はキリストの最後の言葉と同じ様に我々の胸に迫るものがある。彼は最晩年に至っても外見だけは先駆者としての体面を保っていた。彼が事実上崩れてしまっていたら弟子であるキリストは到底恩師に向かって自己の才能を誇る次の様な言葉を吐く事は出来なかったことであろう。

「わたしの現にしていあることをヨハネに話して聞かせるが善い。」

12 悪魔

キリストは40日間断食して肉体を衰弱させることで自己克服の戦いを展開した。我々が誘惑を感じるのは精神的、肉体的危機にある時である。この時、人はそれぞれ自分の弱さに負けたりあるいはそれを克服したりするのであるが、生涯危機に直面することなく自己が何であるか知ることなく一生を終わる人もあるのである。キリストは第一に物欲を退けたが、すぐに物欲が全てではないと言替えている。自力で生きねばならぬという考えを拒否しながら、一方ではむやみに神の加護を期待してはならないと言い添えている。最後に物心両面におけるこの世の名誉の全てを退ける事によって人間世界での野心を捨てたのである。悪魔は議論においてキリ

ストに敗北すると彼の前から引下がる訳であるが、キリストを誘惑する意思を捨てたわけではない。それはキリストが神の子であると同時に普通の女人マリアの子供であったからである。このときの悪魔との精神的闘争はキリストの精神史において重大な意味を与えられているが、キリストがマリアの子供である事を考えれば悪魔の誘惑がこのとき一度だけだったとは到底考えられないのである。事実ルカ伝には「悪魔この試み皆畢りて暫く彼と離れたり」の一文が付加えられている。

13 最初の弟子達

キリストが神の子としての自覚のもとに天国への門を最初に示したのは12歳の時の事であった。ヨハネから洗礼をうけて後、天国への道を説きながら誰も相手にしてくれなかった時は彼もさすがに寂しかったであろう。しかし、とうとう彼は自分の空理空論に耳を傾ける四人の弟子を持つ事になった。彼等ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネに対する愛は生涯変わる事がなかった。弟子達に囲まれながらキリストは、自己の説く天国という概念を空論に終わらせないために手段を選ばぬ優れた実践家になっていった。

14 聖霊の子供

キリストは天国の門を説くことで生活する様になり、その考えによって生活を変え、物欲を捨て、土地に対する執着を捨てた。彼は自分が抱いた空論が実践的思惟となって社会の内部で作動していくことに大いなる喜びを抱いていた。社会との現実的な接触によって自己の理論が鋭くなり、社会規範を破る事で弟子達の非難を受けたとしても。精神主義貫徹を促す「山上の垂訓」は高揚した彼の思考の頂点を成すものであり、彼には旧約世界のいかなる予言者も自分に及ばないと感じられた。このあまりに極端な精神主義は社会で堅実に生き続ける人々のよく理解するところではなかった。多くの実務的人間がキリストに敵対したのにはその内的必然性があったのである。

15 女人

特定の女に束縛されることのなかったキリストは、その極端な現実無視の生き方にもかかわらず常に大勢の女達に囲まれていた。誰よりも強くキリストの愛を求めたマグダラのマリアは、その愛の故に病を癒されキリスト復活の目撃者となりえた。キリストもまた失意の時など、自己の教えに忠実なマグダラのマリアの姿を見ることは大いなる慰めだったのである。信頼で結ばれた二人の師弟関係はあくまで清潔なものであった。男達は売春婦との間の友情関係などに信を置かなかつたし、女達は捨身でキリストの教えに従う事で再生の目撃者となってキリストの愛を一身に受けることになったマグダラのマリアに対して嫉妬している。

「なぜキリスト様は誰よりも先にお母あさんのマリア様に再生をお示しにならなかったのかしら？」

彼女達は貞節な母のマリアの名を語る事で売春婦に愛を示したキリストを非難している。

16 奇跡

キリストにとって比喩を語ったり奇跡を行う事は、余りに容易でありまたそれによって多くの人々を安易に引付けることから不愉快な事であった。また実利的に奇跡を求め続ける民衆の態度は、天国の門を示すことに情熱を持ち続けたキリストにとっては困ったことでもあった訳だ。しかしながら、奇跡だけを求め続ける民衆の要求の前にキリストはしばしば節を折らねばならなかったが、それは彼の余りに人間的な側面であった。ルナンの言うようにキリストの姿に救世主を見た人々にとって彼の存在そのものが、民衆自身の病からの蘇生意思を強固にしたのである。

「お前の信仰はお前を癒した」

このキリストの言葉は客観的に見て事実だったのである。だが奇跡の場面の展開には極度の精神の集中と消耗とを必要としたので、キリスト自身は極力そうした場面を避けようとした。彼も自身の肉体を守るためにその程度の計算はしていたのである。彼は精神内部の衝動を理性で

押える事にかけては、彼の弟子達は無論の事、後代のキリスト者の誰よりも勝っていたのである。

17 背徳者

自分の教えに忠実に従うもの、その者が我が母であり兄弟であり姉妹である。こういうキリストの考えに立脚するなら母のマリアは必ずしもキリストの母と言うわけにはいかない。詩的情熱に駆られた彼は、時として大勢の群衆を前にしてこういう気持ちを率直に披露することもあった。我々平凡人はキリストの精神を理解する一方で、母のマリアの心の寂しさを感じざるを得ない。いや、キリストといえども天国という虚構の世界に自信が持てなくなったときは、母のマリアの心の寂しさに心を寄せる事もあったであろう。

18 クリスト教

キリスト教という余りに精神主義的要素の大きい虚構の世界は、キリスト自身の実行を伴わない無理の多い形而上学的世界である。自分の観念の世界を実践的思惟にするために、虚構の世界に生命を吹込むために、彼は自ら死についた。オスカー・ワイルドがキリストの人生に浪漫主義精神の極致を見たのは当然である。彼の精神至上主義によれば、ソロモン王の地上の栄光は一本の谷間の百合の花の簡素な美しさに及ばないのである。明日の生活を考える程度の経済感覚も天国の門に入るためには邪魔になるというのがキリストの思考である。彼の創造した精神至上主義の清潔な完璧な虚構の世界は、歴史の波の中で消えてしまったが、手垢に汚れた天国の概念は、その後も人間世界に君臨し続けた。だがなんとといっても天国という虚構の概念を最初に人間の思考にもたらしたのは、キリストその人である。実体のない虚構の世界を説明しかつこれを強調するためにキリストが述べた過激な言葉の数々は、合理主義の立場からの説明を拒否することになり、その後神秘的な神学者を登場させることになった。彼等の難解な神学の教義は、キリスト自身を驚かすのに十分で

ある。彼等の精神主義的な生活の実体は、キリスト本人よりもキリスト教の教義に沿うものである。とにかくキリストは我々人間に天国の夢を与えてくれた。人はキリストの人生に我々の人生を奮立たせる浪漫的精神の片鱗を見るのである。また同時に近代知識人の苦悩の原型を見ることもできよう。

19 ジャアナリスト

抽象的概念というものは、我々の精神の根底に響いてくるということはありません。キリストは天国という虚構を説明するのに生活に密着した具体的な比喻をもってした。「花嫁」「葡萄園」「驢馬」「工人」「善いサマリア人」「放蕩息子の帰宅」などいずれも彼のこうした才知の現れである。後代の聖職者達は、キリストのこうした才能について思いを巡らす事はなかった。キリストは後代の聖職者はむろんのこと、詩精神を持ったあらゆる芸術家と比べても引けを取る事のない優れた文芸家であった。彼が創作した文芸作品「新約聖書」は、ギリシャ、ローマの古典に比類しうる。彼はユダヤ社会に残る古い言伝え「旧約聖書」の世界に新しい精神を吹込んだ天才的な作家であった。

20 エホバ

キリストは生涯天国への道を説き続けた。「我々を造ったものは神ではない。神こそ我々の造ったものである。」唯物主義者グールモンのこの言葉は、キリスト教の神によって日常生活を束縛されている我々を日々の思考から飛翔させるものである。が、同時に新しい共産主義という頸木で我々を押え付けるものである。そしてキリスト教社会の束縛よりも共産主義社会の強制の方がより苛酷であるかもしれない。神の概念は形而上学的、抽象的世界から日常的、形而下的なものになってきた。そして種々の社会規範の名を借りて我々の生活を規制している。悪魔と切迫した問答を残しているキリストは同然の事ながらしばしばその属性の本体たる神を感じた事であろう。その神の正体は、キリスト自身が生きた社会の影響を確実に受けた人間臭いもの

であったであろう。彼の場合はユダヤ民族の歴史が生んだ彼等自身の神、我々の生活意識を制約する「主なる神」だった。自分の民族が育んだ抽象的な神の概念、一つの文化的理念に精神を吹込むためにキリストは戦い続けた。この目的の為にキリストが成した奇弁の数々は、後代の神学の論争の尽きせぬ原因となった。ヴォルテールが戦いを挑んだのは、これら神学の教義に対してである。しかし、我々の意識を制約する「主なる神」は死ななかつた。それは日常生活に障害の有るかぎり、人間の精神に浪漫的精神のある限り生き続けるであろう。能力の限界を知り、自己の存在を越えた大なるものに手を差延べる者には、誰にでも天国の門は開かれている。ダンテが「神曲」の中でフランチェスカを救済したように。これらはみなキリスト自身の浪漫的精神から出ている事なのである。

21 故郷

「予言者は故郷に入れられず」革新的な考えを持った若者キリストは、容易に故郷の人々の認めるところとは成らなかつた。故郷からの離脱により必然的にコスモポリタンとなった彼は、全ユダヤの地を歩き回りパレスチナ地方の全てを故郷とすることになった。彼の思考は必然的に普遍的なものに成ったのである。今日の交通の発達、文学者達が自国に止まる事を不可能にした。現にアメリカの作家ポオはフランス人のポオドレエルによって発見されたではないか。

22 詩人

何よりも簡素な美しさに心引かれたキリストは、「ソロモンの栄華の極みの時」より一本の百合の方が美しいといった。弟子達にくらべても極端な精神主義者であったキリストは、何よりも素朴な美しさに魅力を感じた訳である。が、一方上品に取り澄ましているわけではなく自分の思考を比喻によって語る場合など敢えて尾籠な話題も辞さなかつた。

「凡そ外より人に入るものの人を汚し能はざる事を知らざる乎。そは心に入らず、腹に入りて厠に遺す。すなわち食ふ所のものもの潔れり。」

23 ラザロ

飽くまでも自分の考えに忠実なラザロの死を聞いたときキリストは、ラザロの姉妹マルタやマリヤの前で涙を流した。ラザロの復活はキリストの愛の力による。日頃から母のマリアに冷淡であった彼は、肉親などより自分の思考に忠実な者に全くの信頼と愛とを置いていたのである。彼は自分の芸術のために肉親の愛を振切る事のできた利己的な芸術至上主義者であった。

24 カナの饗宴

キリストは女達に囲まれた華やかな生活を愛したが、特定の女との関係を持つとはしなかった。それはモハメットが回教生活圏存続の為に四人の妻を持つことを認めたのと同じである。キリストは特定の女と結ぶ事で、既に存続している社会規範の枠組みに組込まれる事を恐れていたのである。結局二人とも自分が属する民族や時代を越えて生きる事が出来なかったということである。キリストが生涯独身を通したのは、それ以外にも自分の革命的思考が自由に飛翔するために家庭生活が邪魔だと考えたせいかもしれない。近代市民社会では、偉大な革命家といえども平凡な家庭生活を営む事を強制されている。家庭生活の幸福を偽善的と考えたキリストは、世間体を取繕う必要も認めなかった。アメリカの詩人ホキットマンもキリストと同じ私生活を営んだが、我々は彼の詩の中にしばしばキリストと同じ詩精神を見出す事が出来る。躍り子、花束、楽器の喧噪に満ちた「カナの饗宴」で女達に囲まれて愉快地楽しむキリストの声が、今も聞こえてくる様だ。しかし、こうした自由な楽しみ的一方で家庭生活を持つことの無い寂しさも味わなければならなかったであろう。

25 天に近い山の上の問答

キリストは自己の思想を形而上学的観念に終わらせないためには自己の肉体の犠牲が必要であり、死の行為によってのみ自分の信念が、実践的原理となって社会において作動する事を熟知していた。彼は逡巡する自らの肉体に決断を

促すために、高い山頂で旧約世界の偉大なる予言者モオゼやエリアに相談を持掛けた。事実、弱い心に策打って殉教を決意した、この時のキリストほど高い精神性を示した者はいない。この時の精神上的危機から比べれば、自分の心の誘惑と闘った悪魔との問答など取立てて記す程のこともない。モオゼやエリアとのやり取りは聖書にその記述が残っていないが、この時のキリストの心の葛藤の激しさは彼の外見を記した一行の中に尽きているであろう。聖書によれば、彼の顔は「日の如く輝き其衣は白く光」ったのである。モオゼの戦略もエリアの政治力もキリストの人生に何等の奇跡を与えることはない。旧約の世界の予言者達の栄光は既に消え去ったのである。彼はたった一人で自らの人生の決断をしなければならぬ立場に追詰められていた。数千年続いた旧約聖書の伝承の世界から逃れて個人として生残る事は、ユダヤ民族の予言者、人類の救世主の栄光の座を捨てることであり、彼には選択し難い道であった。荒涼たる山頂から人間の匂いのする下界の人生を見下しながら、彼は一人で寂しい決断をするのである。誕生の日に神の子としての宿命を与えた聖霊は、彼に平凡な人生を生きる事を許さないのである。「山も下る時イエス彼等（ペテロ、ヤコブ、その兄弟のヨハネ）に命じて人の子の死より甦るまでは汝等の見し事を人に告ぐべからずと言へり」旧約の予言者に相談して心の葛藤を押えて死の決意を固めた事は、彼に取って誰にも知られたくない心の秘密であった。

26 幼な児の如く

実社会を安易に生き得る者には、容易に天国の門は開かれぬというのがキリストの考えである。こうした発想の根底には、彼自身の社会に対する恐怖感あるいは不適應の弱点が伺える。ゲエテは戯曲「タツソオ」を書く事で彼自身の社会に対する不適應感を昇華させた。世俗に対する軽蔑を強く持っていたキリストは、自力で人生を生きていく事の出来る者を天国から締出してしまった。彼の身辺にあって行動を共にした弟子達は、世間知に欠けたキリストの行為に

しばしば驚いた事であろう。

「我まことに汝等に告げん。若し改まりて幼な児の如くならずば天国に入ることを得じ」キリストが自己の精神的近親者としての幼児と交歓している後代の絵画が、現代を生きる我々の共感を呼ぶ事はあるまい。

27 イエルサレムへ

旧約聖書の言伝えどおりの人生を生きようとしてからのキリストの精神の燃焼は、彼自身の理性を越えた心の内部の衝動による。それは蠟燭に焼かれる蛾の運命を思わせる程に原始的衝動である。自らの理論を生かすために、死地イエルサレムに赴いたキリストの運命をバアナド・ショウは作品「バック・ツウ・メスウズラ」に於いて笑ひ飛ばした。自己の生命を捨てる事が空理空論を永遠の物とすることが出来ると考えた彼は、天才であると同時に数千年ユダヤ民族の間で伝承された予言者の条件を彼自身が、振切る事が出来なかった事を示している。自らの意思によって死地に赴きながら、途中から自己の死の衝動を理性で押え切れなくなった彼は、やはり「人の子」だった。「ホザナよ、ホザナよ」の歓呼の声に迎えられながら死地イエルサレムに赴く彼の背中には、数千年のユダヤ民族の期待が掛かっていたといえる。12使徒の一人ペテロは、キリスト教布教に対する迫害を避けてロオマから離れようとした時、キリストの幻影を見て死地に引戻された。もしキリストがイエルサレムに行くことを避けようとしたら、旧約の予言者の誰かの幻影が彼の行く手を遮ったであろう。

28 イエルサレム

イエルサレムに入ってからキリストは、彼の精神闘争の最後の激しさを示している。それまで周辺の全てに対して愛を以て接した彼は、ここに至って何かしら絶望的な投げやりな態度を見せている。道端の無花果を呪い、挙句に「カイゼルのものはカイゼルに返せ。」と叫んだ。そこには以前の様な情熱的な調子は無く、ロマン的思惟に耽ったために人生を十分に生きられな

かった彼の、人生に対する絶望的な意味合いを含んでいる。それは人間社会の衆愚に対する絶望でもあった。「殿に入りてその中にをる売買する者を殿より逐出し、兌銀者の案、鴿を売者の椅子」を倒し挙句に「この殿も今に壊れてしまふぞ」と予見した。こうした彼の神経を静めるために、ある女は香油を彼に注いで死の準備をさせた。死の足音を聞きながらキリストは、弟子達に向かって自分の死後の覚悟を促すのだった。そして静かに彼等に話かけた。

「この女人はわたしを葬るためにわたしに香油を注いだのだ。わたしはいつもお前たちと一しょにゐることの出来るものではない。」ゲツセマネのオリーブ園で死を覚悟するキリストの姿は、ゴルゴダの丘で現実の死を迎えるキリストよりもより一層の悲壮感に満ちている。そこで彼は死を厭う彼自身の人間的感情と戦い、さらには彼を死地に引摺っていく心の中のデエモンとも戦い悩み続けた。彼が迎えねばならない死の運命は、しだいに確実なものになってきたが、彼自身は誰よりも自己の運命について熟知していた。

「わが父よ、若し出来るものならば、この杯をわたしからお離し下さい。けれども仕かたはないと仰有るならば、どうか御心のままになすして下さい。」

このキリストの祈りは、今日も我々の精神に迫るものがある。このとき誰よりもキリストの身近にいたペテロさえも、この時の師の苦悩について伺い知ることがなかった。形而上学的観念にとらわれた者、何かしら永遠なものを求め続ける者は、誰でも深夜一人で自己の運命について祈りを捧げている。しかし、周辺の者は誰一人そのことについて考えようとしなかった。

29 ユダ

キリストを裏切ったユダは今日悪の代名詞になっているが、当時の状況を考えればユダだけが特に悪かった訳ではない。最愛の弟子ペテロさえ三度師を否認してはいないか。ユダがキリストを密告した行為は、今日でもあらゆる組織において頻発している日常的出来事である。

周囲の全ての人間が、裏切る状況にあるなかで特にユダがその任を果たした事についてパピニは「基督の生涯」においてよくわからないと言っている。しかし祭司の長は、キリストの全ての弟子に対して裏切りの報酬の条件を出していた。たまたまいくつかの条件が、重なってユダがこの役を果たしたにすぎない。歴史上キリストが神の子として栄光の座につくと、ユダは悪魔の子として諸悪の象徴になった。裏切りの行為の後にユダが、ポプラの木で自責のために自殺したことは、悔改める事によって最期に彼の精神がキリストに近づいた事を意味している。師や祭司の長の冷ややかな視線が、彼を追詰めたというよりも彼自身良心の呵責に耐えられなかったと考えるべきである。旧約聖書の多くの先人達の言動を勝手に利用して、自己の個人的な思想を公的な民族の遺産の上に打ち立てようとした利己的な側面を弟子のユダに見たキリストは、自分自身に問掛ける意味で

「お前にしたいことをはたすが善い」と言った。しかし、ユダはこの時のキリストの自問自答の言葉を理解出来なかった。

30 ピラト

キリストの死刑を事実上黙認したロオマ総督ピラトは、キリストの劇的な人生に於いて何の役割も果たしていない。しかし、歴史はユダと同じようにこのロオマ帝国の役人の名を不滅にした。しかし、アナトール・フランスは作品「ユダヤの代官」に於いてキリストの名を記憶していない晩年のピラトの姿を描いている。

31 キリストよりもバラバを

恩赦によって釈放されるべきは、犯罪者バラバであって社会的慣習を打破しようとするキリストではない。人々の怒りが罪を認識しているバラバに向かわず、囚われてもプライドを捨てようとしないう、従って哀れみを請うことをしないイエスに向かうのは当然である。肉体的に頑強なロオマの兵士達はイエスに「荆の冠」を被らせ「紫の袍」を纏わせて辱め、ユダヤの王の名に於いて真実のユダヤ民族の王を打ち倒して

いる。キリストの詩精神が理解出来ない人々は、いやイエスの思索を把握することなど容易であると考えている人々は、キリスト教が地上の権力と結び強制力を行使するまでイエスの立場を理解する事は無いのである。これら精神的奴隷達をニイチエは「街頭の犬」と呼んだ。

「方伯のいと奇しをするまでにイエス一言も答へせざりき。」

キリストの形而上学の世界について何一つ理解することのないロオマ総督ピラトの前でイエスは何も返答しなかった。犯罪者であるバラバは、周囲の者を敵として社会的に反逆している。しかし、キリストは天国の門を歩もうとする彼の思索を阻止する自己の人間の感情と闘っている。その葛藤はより内面的、より宿命的なものであった。

32 ゴルゴダ

「わが神、わが神、どうしてわたしをお捨てなさる？」

十字架の上のキリストは、最期まで精神的葛藤を抱き、煩悶の中で死んでいった。精神主義に徹しきれなかった彼の姿は、笑われるかもしれない。あるいは、彼の詩精神を理解しない者達は、当然の報いと言うかもしれない。

「エリ、エリ、ラマサバクタニ」はキリストの抱いていた精神主義が、肉体的苦痛によって裏切られた決定的瞬間である。この一節が例え詩篇の一句であろうと、最期に人間としての弱き側面を見せる事で、彼は我々にとって身近な存在となったのである。また最期を神の子として全うできなかった彼の人生の悲劇を我々にかいま見せてくれるのである。

33 ピエタ

聖母マリアがキリストの死体を膝の上に抱いて嘆き悲しんでいる図をピエタ（敬虔な哀悼）というのは、誤りではない。しかし、自己の意思により信念に基づいて行動し、概ね歓喜の内に人生を終わったキリストを哀悼の絵画に描き加えるのは適当ではない。マリアだけを描かねばならない。

34 クリストの友だち

キリストは12人の弟子を持っていたが、それは最終的に上下関係であり対等の友人関係ではない。弟子達がいつもキリストの後に付き従う者であることは「これに従ひつかへしものどもなり」と聖書に記されている通りである。唯一の例外がアリマタヤのヨセフである。「日暮るる時尊き議員なるアリマタヤのヨセフと云へる者来れり、この人は神の国を望めるものなり。彼はばからずピラトに往きてイエスの屍を乞ひたり」とあるように、彼は議員という社会的立場を利用してこの反逆者の遺骸をピラトから受取った。危険な行為を無事成し遂げたことや種々の事実関係から彼が、キリストの同調者であり世渡り上手な人間だったことが伺える。利益にならないばかりか、自己の社会的立場を危うくする行為をなした彼の姿には、深い教養とさらには友人キリストへの愛が感じられる。ピラトやユダに比べてアリマタヤのヨセフの名は、今日あまり知られる事が無いが、当時彼がキリストの最大の理解者であったかも知れない。パプテズマのヨセフは自分を死地に追込んだ少女サロメによってその首を皿に載せられ遊戯の道具にされたが、彼に比べればイエスは、友人ヨセフによって手厚く葬られたのだから幸福だったと言うべきであろう。アリマタヤのヨセフがもし議員という社会的立場を持っていなかったなら、キリストの遺骸を引取る事もなく、イエスの人生に介入することなく、後世に名を残す事もなかったであろう。

35 復活

ルナンはキリストの復活の証言をマダグラのマリアの想像力であるとした。彼女の証言が真実味を帯び確信をもって語られたのは、生前のキリストの彼女に対する愛の言動による。パウロの復活論によって言替えれば、彼女は信仰の力によってキリスト復活の目撃者となったのである。また信仰を想像力に置換えて一般論で言えば、愛する子供を失った母親は、仏教の輪廻転生の理念によって自然界のすべてに、死んだ子供の再生する姿を見るであろう。パウロによ

れば、信仰による愛の力によってほとんど無数の人々がキリストの復活を目撃したのである。しかし、キリストの復活は、生前の彼の言動を証明するに止まり彼の空想した形而上学的理念が、現実の社会において有効性を持つためには、パウロによる努力と長い年月が必要であった。キリストの理念の社会における有効性を大衆が知ようになった時、当然の事ながらキリストの考えたこの形而上学的理念は、実社会にあわせてその理想主義的側面を変貌させていった。キリストの空想的理念が、社会での実践的原理となった時彼を殺した大衆は、キリストの名において彼以後の理想主義者を弾圧することになった。しかし、人間の理想主義に打撃を与えようとする者は、その目的地に向かう途中で自らが迫害しようとする者の頭上にキリストの精神を見出し改心するだろう。

「サウロよ、サウロよ、何の為にわたしを苦しめるのか？ 棘のある鞆を蹴ることは決して手易いものではない。」

我々は、自らの死を迎える日まで続く苦しい人生の戦いの日々、何か美しい物を夢見ることがある。キリストが残した形而上学的思念は、我々のこのささやかな人生の夢にある根拠を与えてくれるのである。

36 クリストの一生

キリストの一生は、天国というロマン的思惟を思索した天才に相応しい弛緩のない人生だった。彼の悲劇的な死は、過激な思想を実践的なものにしようとした革命的生き方に起因する。ゲエテもキリストと同じ詩精神を持ち、キリストのような人生を終わる事をのぞんだが、結果的には晩年を全うして神秘主義者になった。その理由は、彼が自らの精神のデエモンを自分で押える合理的理性を持っていたことによる。ゲエテの誕生を告げた運命の星は、キリストのそれより実人生において輝いていた。しかし、我々がゲエテを愛するのは彼の人生が立派であるからではない、実人生を完璧に生抜く人間は、世間の至る所に満ちている。我々がゲエテを愛するのは、彼の詩精神を愛しているにすぎない。

我々は長い人生の過程で必ずキリストの人生との接点を持ち、キリストの愛に目覚めるのである。実社会を立派に生抜いたゲエテもまた、自己の詩精神にキリストとの接点を見出し、その微妙な関係を彼の詩に託している。キリストの人生は悲劇的であったが、実社会に合わない浪漫的 spirit を持った者の一生を象徴している。キリストの創作した精神主義、空想的ロマンは社会の推移と共に変貌したが、しかし、自己の抱いた形而上学的思惟に生命を吹込むため、社会に作動する実践的思惟にするために、生命を捨てた一人の男の人生は、我々に感動を与えずにはおかないのである。それは空想を一つの有効な理論にするために倒れた挫折の人生と言えよう。

37 東方の人

挫折の人生を天国に対する憧憬によって是正せんとする宗教をニイチエは「衛生学」と呼んだ。宗教は思い通りに生きられずに、いらだつ我々の精神を静めるのに実に有効である。仏教は大抵諦観によって人生の挫折感を克服しようとしている。老子の安心立命の境地は、一面では仏教の諦観に通じている。ヨーロッパに育ったキリスト教とアジアに育った仏教と、それほど根本的な差異がある訳ではない。キリスト教の精神が、我々の理解の範囲にあるのはそのためである。「古来英雄の士、悉く山河に帰す」という東洋的人生観は、我々の精神に宿っている。が、一方「天国は近づけり」と言うキリスト教的終末観も我々を奮立たせる。諦観の人生に生きるべきか、積極的に生きるべきなのか、老子は年下の孔子と論議している。浪漫的 spirit を持つ者は誰でも、実人生において自己の美しい幻想が傷付けられる事を経験しないでは生きられない。諦観によって人生を生き様とした東洋の賢人達も例外ではない。旅から旅へと流浪するキリストの漏らした言葉、「狐は穴あり。空の鳥は巢あり。然れども人の子は枕する所なし」この弱気な一言は、現代を生きる我々の精神の在り様を言いあてている。宗教であれ哲学であれ我々は、容易に安心立命の境地にたつ事が

出来ないのである。

注

- 1 「北原白秋や木下杢太郎氏の播いた種」—白秋や杢太郎が与謝野寛、平野万里、吉井勇らと長崎、天草、島原、平戸などのキリシタン遺跡を尋ねたのは明治40年8月であり、そこから生まれた南蛮詩—たとえば白秋の「邪宗門秘曲」「入日の壁」「ほのかなる蠟の火に」、杢太郎の「長崎ぶり」「黒日」「あまくさ」などの宗教的情趣や異国情緒のあいからむ耽美性が、芥川らの世代に深い影響を与えたことは頷ける。ただ白秋の影響下から出た萩原朔太郎の「浄罪詩篇」（『月に吠える』前期）に宗教的エキゾチズムを越えた実存的志向の誕生を見るごとく、芥川にもこれを越えた実存的志向への深まりの見られることが注目される。（テキスト評釈「西方の人」「統西方の人」佐藤泰正『国文学』芥川龍之介、昭和56年5月、以下「評釈」と省略）
- 2 「マリア」—キリストの母、聖母マリア。カトリック教会ではキリストと並んでマリアの存在は大きく、その永遠の処女性、無原罪が強調される。しかしここでは塵勞の只中に生きる人間マリアの存在が強調される。（評釈）
- 3 「或夜聖霊に感じて」—（マタイ1-18）
- 4 「永遠に女性なるもの」—（ゲエテ「フアウスト」第2部第5幕終末部）
- 5 「涙の谷」—（詩篇84-6）
- 6 「聖霊」—創造者なる神の霊、またキリスト教神観では父なる神、子なるキリストとともに三位一体のものとみられる。霊をあらわすヘブル語は本来、風、息を意味し、見えざる神のはたらきを示す。（評釈）
- 7 「ヨセフ」—クリストはマリアの子とはいわれるがヨセフの子といわれない。ヨセフが早く死んだためか、とルナン『耶蘇伝』はいう。（大系 418P）
ヨセフは、その子が公けの役割を演ずるに至らぬうちに、亡くなった。かくてマリアが家長となった。さうしてこの故に、人々は、イエスを他の大勢の同名人と区別したいとき、大抵の場合、「マリアの子」と呼んだ。「ルナン『イエス伝』第5章」（芥川龍之介『西方の人』全注解、吉田孝次郎、中野恵海著『清水弘文堂』昭和57年5月、以下「注解」と省略）
- 8 「エリザベツ」—（ルカ1-5）
- 9 「美しいマリア」—マリアの美しさは聖書には別に説

- いていない。しかし後の宗教画に描かれたマリアは非常に美しい。(大系 418P)
- 「美しいマリア」というイメージは聖書に根拠がない。それはカトリック、又ルネッサンス芸術のものである。したがってルネッサンスの芸術家達が描いたように、その美はその背景としての壮麗な貴族的雰囲気と相応わしいものであり、またダ・ヴィンチの「受胎告知」が描いているように、天使の権威に枯坑しうるだけの気品の高さをもっている。したがって畠の野菜や素焼の瓶などとは感覚的に調和しない。(笹淵友一「西方の人」論『明治大正文学の分析』所収、昭和45年明治書院刊 895P)
- 10「東の国の博士たち」—(マタイ 2—1)
- 芥川龍之介の初期の翻訳小節「バルタザアル」(大正3年1月17日)は、東方より星の導きによってベツレヘムに至り、イエスの降誕を説いた三博士の一人を主人公にして虚構の世界を新約聖書マタイ伝第2章に結付けた、アナトール・フランスの歴史小説である。
- 11「彼はキリストを恐れる為にベツレヘムの幼な児を皆殺しにした。」—(マタイ 2—16以下)
- 12「ガリラヤのうちに避け、ナザレと云へる邑」—(マタイ 2—22, 23)
- 13「キリストのボヘミヤ的精神」—パピニの「イエス伝」では、イエスを放浪者・無宿者と呼んでいる。彼は永遠の旅人であり、「さまよえるユダヤ人」であった。(大系 419P)
- 14「人の子」—イエスの自称 (マタイ12—32), (マタイ 17—22)
- 15「ヨハネに遭遇した」—(マタイ 3—13)
- 16「ヨハネは野蜜や蝗を食ひ、荒野の中に住まっていた。」—(マタイ 3—4)
- 17「バプテスマヨハネはロマン主義を理解出来ないキリストだった。」—福音は実現について考えない夢想郷への導きであり、靈魂の自由を説くものであった。それに反してヨハネは夢をもたず、政治にも無関心でなかった。(ルナン「イエスの生涯」大系 420P)
- 18「キリストの最後の慟哭」—(マタイ27—46)
- 19「キリストはお前だったか、わたしだったか?」—(マタイ11—3)
- 20「わたしの現にしてゐることをヨハネに話して聞かせるが善い」—(マタイ11—4)
- 21「悪魔と問答」—(マタイ 4—1…11)
- 22「パンを斥けた」—(マタイ 4—3, 4)
- 23「パンのみでは生きられない」—(マタイ 4—4)
- 24「彼自身の力を恃めと云ふ悪魔の理想主義的忠告を斥けた」—(マタイ 4—6)
- 25「主たる汝の神を試みてはならぬ」—(マタイ 4—7)
- 26「『世界の国々とその栄華と』を斥けた」—(マタイ 4—8…10)
- 27「ヤコブの天使と組み合った」—(創世記32—24)
- 28「サタンよ、退け」—(マタイ 4—10)
- 29「悪魔この試み皆畢りて暫く彼を離れたり」—(ルカ 4—13)
- 30「12歳の時に彼の天才を示している」—(ルカ 2—42…52)
- 31「4人の弟子たち」—(マタイ 4—18…22)
- 32「彼を理解しない弟子たちの中に時々ヒステリイを起こしながら」—(マタイ 8—23以下), (マタイ14—29以下), (マタイ19—13)
- 「山上の教へ」—(マタイ第5章…第7章)
- 33「マグダラのマリア」—イエスの復活を最初に見た婦人 (マルコ16—9)
- 34「七つの悪魔」—神経症 (ルナン「イエス伝」), (マルコ16—9), (ルカ 8—2)
- 35「彼女のまつ先に彼を見た」—(ヨハネ20—16)
- 36「比喩」—ルナンによれば、多くは俗諺として民間に用いられた口語的教訓で、イエスはそれに精神をふきこんだという。(大系 423P)
- 37「ルツソオの吼り立った」—(『エミール』第4篇「サヴォア人司祭の信条告白」)
- 38「お前の信仰はお前を癒した」—(マタイ 9—22)
- 39「科学的真理」—病気が何ら身体的原因から起こるものでなく、罪に対する罪、あるいは悪魔の仕業と見られている時に、超自然的世界に能力を有する聖者は、最良の医師であった。なおるということは精神的なことと考えられていたから、自己の精神力を知っていたイエスは、自らなおす力を特に授かった者と信じていたに違いない (ルナン「イエス伝」第16章, 大系 424P)
- 40「12人の弟子」—(マタイ10—2…4)
- 41「かう云ふ彼の気もちを言ひ放すことさへ憚らなかつた」—(マタイ12—48以下)
- 42「キリスト教はキリスト自身も実行することの出来なかつた、逆説の多い詩的宗教である」—キリストの教

- えはしばしば人情の限界をこえる。「汝等ことごとくその所有をすてざる者は我が弟子となること能はず」若し我に従はんと欲するものは己れをすてて十字架を負ひて我に従へ」などがそれだとルナンはいう。(大系 424 P…425 P)
- 43「ワイルドの彼にロマン主義者の第一人を発見したのは当たり前である」—「ぼくはクリストのうちに、ただ最高のロマンチックな性格の種々の本質的要素を見るばかりでなく、同時にロマンチックな気質に属するあらゆる偶発的な事柄、あえていえば気まぐれな我意をさえ見るからだ」(『獄中記』大系 425 P)
- 44「『ソロモンの栄華の極みの時にだにその装ひ』は風に吹かれる一本の百合の花に若かなかった」—(マタイ 6—29)
- 45「あすの日を思ひ煩はずに生活しろ」—(マタイ 6—34)
- 46「天国に対する愉悅を呼び起した第一人だった」—「『神の国』『天国』という語に…『ダニエル書』の著者その人がその黙示録的熱情のうちでほとんど予見しえなかったところの、精神的意味・社会的価値を与えたのであった。…まことに彼の樹てたものは神の国である。これは精神の国という意味だ。…(ルナン『イエス伝』大系 425 P)
- 47「花嫁」—(マタイ 25—1)
- 48「葡萄園」—(マタイ 21—33)
- 49「驢馬」—(ルカ 13—15…17)
- 50「工人」—(ルカ 14—28…30)
- 51「善いサマリア人」—(ルカ 10—29…35)
- 52「放蕩息子の帰宅」—(ルカ 15—11…32)
- 53「我々を造ったものは神ではない、神こそ我々の造ったものである」—「神『人間よ、誰がお前を造ったのだ』人間『神よ、誰がお前を作ったのだ』」(グールモン「対話」大系 426 P)
- 54「詩的正義」—「クリストの正義はすべて詩的正義だ。そして、正義とはまさしく詩的正義であるべきだ。乞食は不幸であったがゆえに天国へゆく。…ぶどう園で涼しい夕刻の一時間だけを働いた者が、炎天のもとで一日中苦労したものと全く同じだけの報酬をもらう」(『獄中記』大系 426 P)
- 55「予言者は故郷に入れられず」—(マタイ 13—57), (ルカ 4—24)
- 56「クリストは一本の百合の花を『ソロモンの栄華の極みの時』よりも更に美しいと感じてゐる」—(マタイ 6—29)
- 57「凡そ外より人に入るものの人を汚し能はざる事を知らざる乎。そは心に入らず、腹に入りて厠に遺す。すなわち食ふ所のもの潔れり。」—(マタイ—15—17, 18) (マルコ 7—18, 19)
- 58「クリストはラザロの死を聞いた時、今までにない涙を流した」—(ヨハネ 11—33…35)
- 59「ラザロの死と復活」—(ヨハネ 11—1…45)
- 60「母のマリアを顧なかつた彼はなぜラザロの姉妹たち、—マルタやマリアの前に涙を流したのであろう?」—「彼はここで、姉と妹ともうひとりの家族と、三人暮らしの家を知り、彼らの愛情は、イエスによって大きな魅力であった。(略)イエスはここで、敬虔な愛情のうちに、公生活の味気なさを忘れた」(ルナン「イエス伝」大系)
- 61「カナの饗宴」—(ヨハネ 2—1…11)
- 62「後代の超人たちの犬の中に仮面をかぶることを必要とした」—ニイチエは『善悪の彼岸』の中で、超人は家畜の群れの凡族を離れて、強い意思をもって高尚な生を生きるために仮面をかぶらねばならない、と言っている (大系 428 P)
- 63「高い山の上」—(マタイ 17—1…13), (マルコ 9—2…13)
- 64「彼はその何日か前に彼の弟子たちにイエルサレムへ行き、十字架にかかることを予言していた」(マタイ 16—21), (マルコ 9—31)
- 65「彼の顔は『日の如く輝き其衣は白く光』つた」—(マタイ 17—1, 2)
- 66「紅海の波も壁のやうに立たなければ」—(出エジプト記 14—21)
- 67「炎の車も天井から来ないのである」—(列王紀略 2—11)
- 68「見苦しい死」—(マタイ 27—11…46)。 (マルコ 14—43…72) (マルコ 15—1…47)
- 69「山を下る時イエス彼等(ペテロ、ヤコブ、その兄弟のヨハネ)に命じて人の子の死より甦るまでは汝等の見し事を人に告ぐべからずと言へり」—(マタイ 17—9) (マルコ 9—9)
- 70「我まことに汝等に告げん。若し改まりて幼な児の如くならずば天国にいることを得じ」—(マタイ 18—3), (ルカ 18—17)
- 71「幼な児を前にしたクリストの図の我々に不快を与へ

- るのは後代の偽善的感傷主義の為である」—(マタイ 19—13)
- 72「メシヤ」—「Messiah(救世主, 英語), (聖油をそそがれた者, ヘブライ語), (ギリシヤ語訳, Christos クリストの名の由来)
「旧約」時代には, 予言者・司祭・王たちは聖油をそそがれるならわしであり, クリストは予見者・大司祭主の王として神から油をそそがれ, 人類救済のため, この世に降誕した「救世」だから, この名称で呼ばれる。(大系 430P)
- 73「ホザナよ, ホザナよ」—「Hosanna(救い給え, 英語), 神を賛美し, 救いを求める意」(マタイ21—9…15)
- 74「彼の後に生まれたクリストの一人は遠いロオマの道の上に再生したクリストに『どこへ行く?』と詰られたことを伝えてある」—司徒ペテロは, クリストの死後, 迫害に耐えず, ロオマをさろうとする途上, クリストの幻影に会い, 再びロオマに引返した。
- 75「クリストはエルサレムへはひつた後, 彼の最後の戦ひをした。それは水々しさを欠いてゐたものの, 何か烈しさに満ちたものである」—イエスは熱情の恐るべき増進に引ずられ, しだいに熱をおびてゆく説教の必然の勢いに縛られ, もう自由でなくなった。(略)おりおり彼の理性は乱れたように見えた。(略)生来の柔和さは彼を捨て去ったように見えた」(ルナン「イエス伝」大系 431P)
- 76「彼は道ばたの無花果を呪った」—(マタイ21—18, 19), (マルコ11—12…14)
- 77「半ばヒステリックに彼の破壊力を押さへる」—彼はおりおり気むずかしかったし, 容子が妙であった。弟子達は, 時折彼が分からなくなったり, 彼に向かうと一種の恐れをいだいた。彼はあらゆる反抗に不機嫌となり, それに引ずられて行き, 合点のゆかない, 見た目には馬鹿げた, 数々の行為をするに至った(ルナン「イエス伝」大系 431P)
- 78「カイゼルのものはカイゼルに返せ」—(マタイ 22—15…22)
政權の正当性を自認し, 世界を現在の絶対権力に委ねたことばとルナンは解釈した
- 79「殿に入りてその中にをる売買する者を殿より逐出し, 兌銀者の案, 鴿を売者の椅子」を倒させてゐる—(マタイ 21—12), (マルコ11—13)
- 80「この殿も今に壊れてしまふぞ」—該当箇所聖書にな
- し
- 81「或女人はかう云ふ彼の為に彼の額へ香油を注いだりした」—(マタイ26—6…13), (ヨハネ12—2…8)
- 82「この女人はわたしを葬る為にわたしに香油を注いだのだ。わたしはいつもお前たちと一しょにゐることの出来るものではない」—(マタイ26—12), (ヨハネ12—7)
- 83「ゲツセマネの橄欖はゴルゴダの十字架よりも悲壯である」—(マタイ26—36…46), (ルカ22—39…46)
- 84「わが父よ, 若し出来るものならば, この杯をわたしからお離してください。けれども仕かたはないと仰るならば, どうか御心のままになすって下さい」—(マタイ26—36…41)
- 85「いたく憂て死ぬばかり」—(マタイ26—36…38)
- 86「ユダ」—盗人であり, 財布を預かっていて, その中身をごまかしていた(ヨハネ12—6)
- 87「ペテロさへ庭鳥の声を挙げる前に三度クリストを知らないと言っている」—(マタイ26—69…75)
- 88「パピニも亦ユダのクリストを売ったのを大きい謎に数へている」—「ユダの神秘は贖罪の神秘に二重に結いつけられて居り, 我々最も小さき者にとっては, 一つの神秘として残るだろう」(パピニ「クリスト伝」大系 433P)
(1) ユダがクリストが神の子たることを証明する機会を与えようと望んだ
(2) ユダひとりが12使徒中, 異種族だつた
- 89「白揚の木に縊死してしまった」—(マタイ27—1…5)
白揚の樹のことは, 聖書には記述がない
- 90「お前のしたいことをはたすが善い」—(ヨハネ13—27)
- 91「ユダに対するクリストの言葉は軽蔑と憐憫とに溢れてゐる」—ユダは愛されなかったのでキリストを売った(モーリヤック「イエス伝」)
- 92「クリストよりもバラバを」—(マタイ27—21), (マルコ15—11), (ルカ23—19), (ヨハネ18—40)
逾越祭の恩典の慣例的行事に従つてピラトが釈放した囚人。その時もう一人の囚人だったイエスは十字架にかけられた
- 93「ニイチエは後代のバラバたちを街頭の犬に比へたりした」—「これをもて彼等は狼を犬となし, 人間そのものをも人間のいと善き家畜となしき」(ツアラトウストラ)
- 94「荆の冠をかむらせ, 紫の袍をまとはせた」—(マタイ

- 27—29), (マルコ15—17), (ヨハネ19—2)
- 95「ユダヤの王安かれ」—敵がイエスの役割と主張との要約であるかのように唱えてたてたところの「ユダヤの王」という呼称は、ローマ官憲の疑惑を刺激するのに一番良い口実であった。イエスはこの方面から、反徒とし、国事犯として咎められるはじめてのである。(ルナン「イエス伝」大系 434 P)
- 96「方伯のいと奇しとするまでにイエス一言も答へせざりき」—(マタイ27—14), (マルコ15—5), (ルカ23—9), (ヨハネ19—9)
- 97「わが神、わが神、どうしてわたしをお捨てなさる？」—(エリ, エリ, ラマサバクタニ“Eli, Eli; Lama Saba-chthani”) (マタイ27—46), (マルコ15—34)
- 98「ピエタ」—「敬虔な哀悼」(イタリア語) 十字架からとり下ろしたイエスにマリアがすがって泣いている絵。この構図は14世紀のドイツに始まるという。なおピエタは聖母に支えられるのみでなく、地上に置かれた死せるキリストの周囲に敬虔な婦人たちや使徒などの多数の人物が集まっている情景としても表現されている。イエスが十字架に掛かった時に、イエスの母マリアがたたずんでいたと記したのは「ヨハネ伝」(19—25)のみであり、他はマグダラのマリア、その他の名はあげても、イエスの母を上げていない。故にルナンは「ヨハネ伝」を信じない。
- 99「アリマタヤのヨセフ」—(マタイ27—57…60), (マルコ15—42…46), (ルカ23—50…53), (ヨハネ19—38)
- 100「日暮るる時尊き議員なるアリマタヤのヨセフと云へる者来れり、この人は神の国を望めるものなり。彼はばからずピラトに往きてイエスの屍を乞ひたり」—(マルコ15—43)
- 101「マコ」—四福音書中最も短く、最も早く書かれた。他の福音書のような重厚さや、神学的な特色は見られないが、それだけ素朴、簡潔なうちに、よく神の子キリストの生きた姿を描き出している。(大系 435 P)
- 102「ヨハネの首を皿にのせたものは残酷にも美しいサロメである。」—(マタイ14—1…12), (マルコ6—14…29) ワイルドの戯曲「サロメ」の材源
- 103「復活」—(マタイ28—1…20), (マルコ16—1…20), (ルカ24—1…53), (ヨハネ20—1…31, 21—1…23), (使徒行伝1—3…11, 2—1…8, 9—3…8)
- 104「ルナンはキリストの復活を見たのをマグダナのマリアの想像力の為にした」—そのおり、マグダラのマリアの強い想像力が、主役を演じた。愛の崇高な能力！幻想におそわれた女の愛情が、復活した神を世界に与えるその聖い瞬間！(ルナン「イエス伝」大系 436 P)
- 105「クリストの天才を全身に感じたジャアナリストのパウロである」—(使徒行伝8—1, 9—3…8, 22—3…21, 26—4…18)
- 106「クララ」—クララ修道女会といわれるカトリック修道会の創立者。アッシンジのフランチェスカの最初の女弟子で、後年聖人の列に加えられた。(大系 436 P)
- 107「ダマスカスへ向ふ途の上に必ず彼等の敵の中に聖霊を見ずにはゐられなかった」—パウロはキリスト教徒を迫害しようとしてダマスカスへ向かう途中、キリストの姿を見て回心した。(大系 437 P)
- 108「サウロよ、サウロよ、何の為にわたしを苦しめるのか？ 刺のある鞭を蹴ることは決して手易いものではない」—(使徒行伝26—15)
- 109「シエクスピアの復活を認める」—(坪内逍遙「芸術殿」昭和10年2月)
- 110「徐ろに老いるよりもさっさと地獄へ行きたい」—(『ファウスト』第一部)
- 111「ストリントベリイの言ったやうに晩年には神秘主義者になったりした」—(ストリントベリイ「ダマスカスへ」第32部第4幕「僧院の礼拝堂」の場)
- 112「彼の誕生を知らせる星」—(ゲエテ『詩と真実』第一章)
- 113「ゲエテも亦彼の詩の中に度たびキリストの髯をぬいてゐる」—(ゲエテ『伝説』聖譚)
- 114「それは天上から地上へ登る為は無残にも折れた梯子である」—原稿も「改造」初出もこのままであるが、「地上から天上へ…」とすべきで、芥川の誤謬と思われる。参照(ヨハネ20—17)「土砂降りの雨という条件を成立たせるためには、雨は上方の空から下方の地上に、降らなければならないし、したがって梯子も地上から空に向かって立てられ、且上部が折れて傾いていなければならない。だからこの一文は視覚的イメージとしても成立不可能である。」(笹淵友一「芥川龍之介『西方の人』新論、ノートルダム清心女子大学紀要 昭和52年3月)
- 115「ニイチエは宗教を『衛生学』と呼んだ」—(ニイチエ「この人を見よ」第一章)
- 116「無何有の郷」—自然で何等人為のない楽土、無為の仙境(『莊子』応帝王)

- 117「古来英雄の士、悉く山阿に焔す」—出典はさだかでないが、ただ語句の意味の似たものとして『蘇東披詩集』巻22に「日日出東門」と題した五言古詩があり、その後半の句に「古来賢達人／此路誰不由／百年萬華屋／千載焔山邱」という詞句がある。(評釈)
- 118「天国は近かずけり」—(マタイ 3—2), (マタイ 4—17), (マタイ 10—7)
- 119「老子はそこに年少の孔子と、一或は支那のクリストと問答してゐる。」—孔子と老子の問答を記載(『莊子』外篇「天運」第14)
- 120「狐は穴あり。空の鳥は巢あり。然れども人の子は枕する所なし」—漂泊生活にあきたイエスの言葉(ルナン), (マタイ 8—20)

補注1「芥川龍之介と聖書」

- A「元訳聖書」(『明治訳聖書』新訳—明治23年完訳, 旧訳—明治30年完訳)
芥川枕頭の書として有名, 「西方の人」執筆における引用の聖書詞句はこれに拠る。現在近代文学館所蔵。芥川による傍線部分を下記に記す。(筆者は未見)
「マタイ伝」(5—3…12), (6—23, 25), (14—31), (17—12の一部), (18—3…9, 22), (20—28), (21—31, 32), (22—32, 37), (23—11, 12, 26), (24—2の一部, 9…13, 35), (26—42…44)なお5章6章7章全体上欄に傍線。
- B「改訳聖書」(『大正訳聖書』大正6年改訳)
米国聖書協会勤務の室賀文武より贈呈(大正15年3月5日), 現在所在不明。
- C「英文聖書」(“The New Testament”明治35年)
一高在学中, 井川恭より贈呈。芥川による傍線部分を下記に記す。(著者は未見)
「マタイ伝」(4—4…), (5—14後半, 15, 44), (6—24, 25後半, 28, 29後半, 30前半, 34), (7—6中間部, 12前半, 15), (10—29), (12—30), (13, 3後半, 4…8, 13後半, 14後半, 57後半), (15—14後半), (18—3後半, 12後半, 13), (19—23後半, 24), (23—27後半)
- 「マルコ伝」(3—24, 25), (4—3…8, 12前半, 21後半, 3—32), (5—9後半), (10—23後半, 24後半, 25)
- 「ルカ伝」(3—22後半), (6—27)後半, 28, 29前半, 31…34, 35冒頭部, 39後半), (8—5…7, 8前半,

- 16, 30), (11—2後半, 8, 17後半, 33), (12—6, 23, 24前半, 27, 28前半, 39後半), (13—6…9), (15—7), (16—10, 13前半と終末部, 22中間部, 22後半, 29の一部), (17—2, 37後半), (18—17後半, 19後半, 24後半, 25, 27後半), (19—17後半), (20—25後半, 38), (21—26後半, 29後半, 30) (22—26後半)「ヨハネ伝」(1—32後半), (3—20), (4—44後半, 46中間部), (7—24前半)「ロマ書」(12—15)「コリント前書」(13—1)「コリント後書」(3—3)「テモテ前書」(6—10前半)

D「学生時代ならびに習作時代の芥川には、もうひとつ日本語の聖書があったことも考えられなくはなくなって来る」(高堂要「芥川龍之介と聖書—その習作時代における—」『探求』50号, 昭和50年12月)

Aは求心的, Cは遠心的であるが, Cの内部からは, 初期の習作, 戯曲「暁」, 未発表原稿「基督に関する戯曲断片」などに見られる聖書への情熱が感じられない結果。

補注2「芥川龍之介とルナン『イエス伝』」

- A「『キリスト教起源史』の一つ“Antichrist”の英訳書」
B「ルナン氏耶蘇伝」(網島梁川・安倍能成訳, 明治41年9月)
C「耶蘇の生涯」(加藤一夫訳, 大正10年1月)
D「耶蘇」(広瀬哲士訳, 大正11年10月)
芥川が「西方の人」執筆に際して「イエス伝」をなにに拠って読んだか, 現在のところ確定できない。

補注3「芥川龍之介とパピニ『基督の生涯』」

- A英訳“The story of Christ”(1924年刊)
B「きりすと伝」(柴田勝衛「警醒社」大正13年2月, 8月【後編】)ルナン同様パピニの「基督の生涯」も, 芥川がどれに拠ったか確定できない。
イ, 「ボヘミアンと呼ばれる放浪者」
ロ, 「比類なき逆説作家」
ハ, 「ユダこそは福音書に見られる唯一の人間の謎である」(29ユダ)
ニ, アリマタヤのヨセフを「友達」と呼ぶ
イ, ロ, ハ, ニはそれぞれ両作品の重なる箇所である。
(茅野直子「西方の人」とパピニの「基督の生涯」)

青山語文 昭和49・3)

付記

「西方の人」の材源については、(1)吉田精一「日本近代文学大系38」(大系)、(2)佐藤泰正「テキスト評釈『西方の人』『続西方の人』」(評釈)、二氏の先学の研究に尽きている。(2)は(1)の研究成果を踏まえ、より深化させている訳だが未だ完全なものではない。補注1、補注2、補注3、に掲げたテーマについて、筆者自身本稿の続編として別稿を用意すべく準備したい。